

## 1956年「これが明日だ」展再考 — 「グループ2」の展示を中心に —

よしむら のりこ

吉村 典子 (宮城学院女子大学)

## 発表要旨

14  
時  
10  
分  
—  
14  
時  
50  
分松  
ヶ  
崎  
・  
東  
キ  
ャ  
ン  
パ  
ス  
内  
60  
周  
年  
記  
念  
館  
1F  
記  
念  
ホ  
ール

「これが明日だ」(*This is Tomorrow*)は、1956年ロンドンのホワイトチャペル・ギャラリーで開催された展覧会である。美術家や建築家らが12のグループに分かれ、ギャラリーの12の区画内でそれぞれが空間デザインをし、作品を発表した。戦後の美術史に必ずや登場するリチャード・ハミルトンの《一体何が今日の家庭をこれほどに変え、魅力あるものになっているのか?》は、この展覧会で彼が属した「グループ2」(以下G2と表記)のポスターとカタログのために制作されたものである。この作品およびG2の展示が、「ポップ・アート」(この時点では「マスメディアの産物」という意味)を用いたインパクトの強いものであったが故に、後に、この展覧会自体が、「ポップ・アートの幕開け」として、また、G2の展示やポスターが、今日でいう「大衆文化に基づく芸術作品」という意味での「ポップ・アート」を象徴する作例のように語られてきたところもある。しかし、今一度、この展覧会開催までの経緯、そして発表された作品等を精査すると、実際は、全12のグループの中では「ポップ・アート」を意識するグループは少数派であるし、「ポップ・アート」と最も関連のあるG2すらも、それ以上に表そうとした点がみられる。

本発表では、まず、この展覧会開催の経緯を整理し、実際の展示の様相を明らかにする。1946年に設立した現代芸術研究所(ICA)を拠点としたインディペンデント・グループ(以下IGと表記)が、「これが明日だ」展に深い関わりがあるのだが、実際は「ポップ」を議論したIGのメンバーより、構成主義等を標榜するIG以外の作家の関わりが、数にしては圧倒している。そして方向性も実に様々なのである。まずは展示全体を概観したうえで、G2を精査する。G2の制作過程、公表内容、発表前後のメンバーの言説を通して、この展覧会における特質を考察する。

これらにより見えてくることは、G2はポップの「表象」のこととともに、「知覚」の問題を多角的に扱っていることである。このことは、ハミルトンの言説「必要なことは、イメージの意味を明確にすることではなく、我々の知覚の潜在能力を発揮させることである」につながる点でもある。これは、《一体何が…》についても再考すべき点であろう。以上の試みにより、「ポップ」のインパクトの陰に、これまで見過ごされてきたG2のもう一つの表現意図およびイギリス1950年代の様相を明らかにできるものと考えられる。